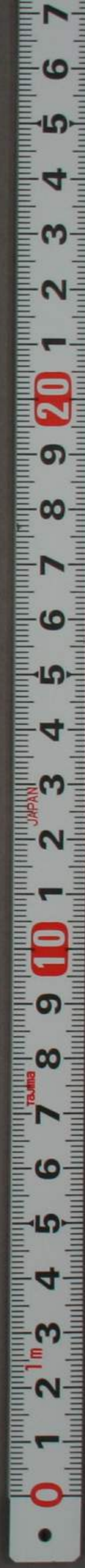


角抵谷風畧傳  
大槻玄津撰  
自筆稿本

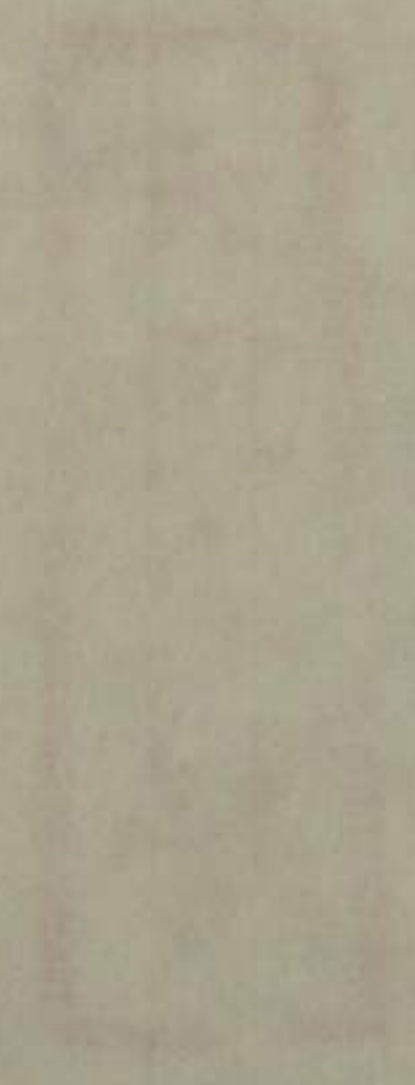
重文  
洋学文庫  
文庫8  
A 63



特  
118  
115

月  
秋  
谷  
風  
畧  
傳

並  
錄



角抵谷風畧傳

並肖像  
墓表

天觀文庫



谷風畧傳

角触人谷風之秋仙其子の言歴ありて府を

距りし一里ありの東郊宮城郡岩目

村の農民藤元とありて小名成ありて

角触人と命をいふなり

相撲は、今迄に、藤元と稱し、幕の初、角力、  
中、角力、と云ふ、毎、年、角力、と云ふ、あり、なり、

り、角力、と云ふ、あり、なり、

角力、と云ふ、あり、なり、

角力、と云ふ、あり、なり、

角力、と云ふ、あり、なり、

角力、と云ふ、あり、なり、



市村お藤自河行司十九代孫

名田追風

刊 朱下

寛政三年一月十日 於吹上

將軍家角力 上吹上の向を以時由  
の二年々々なる末彦の由揚山花川に命  
を命 揚と心ゆく 少中川に命を命し  
流田保 揚と心ゆく 答へてのつ多  
うやまひさけ ころころけぬ 藤と下  
名 山陽より退散 ぬらり  
し 相き ころころ名を吹散

け付 西より 藤君の命を命し 永世苗  
字 常力 結布おと 行 ころころ  
子氏と補す 其後 寛政三年申寅有  
廿二日 於河内殿 上吹の向に  
命 少中川 命を命し 多  
す ころころ 命を命し 又揚と  
吹上の向に 角力と 命を命し  
揚 ころころ 命を命し  
百合と 命を命し 命を命し  
二きし 將軍家の上吹氏 建て  
ころころ 命を命し 命を命し







碑石全圖

仙臺城南鍛冶街淨土真宗東漸寺建

石之高五尺八寸  
幅上三尺七寸

中四尺餘

下三尺八寸

厚二尺七

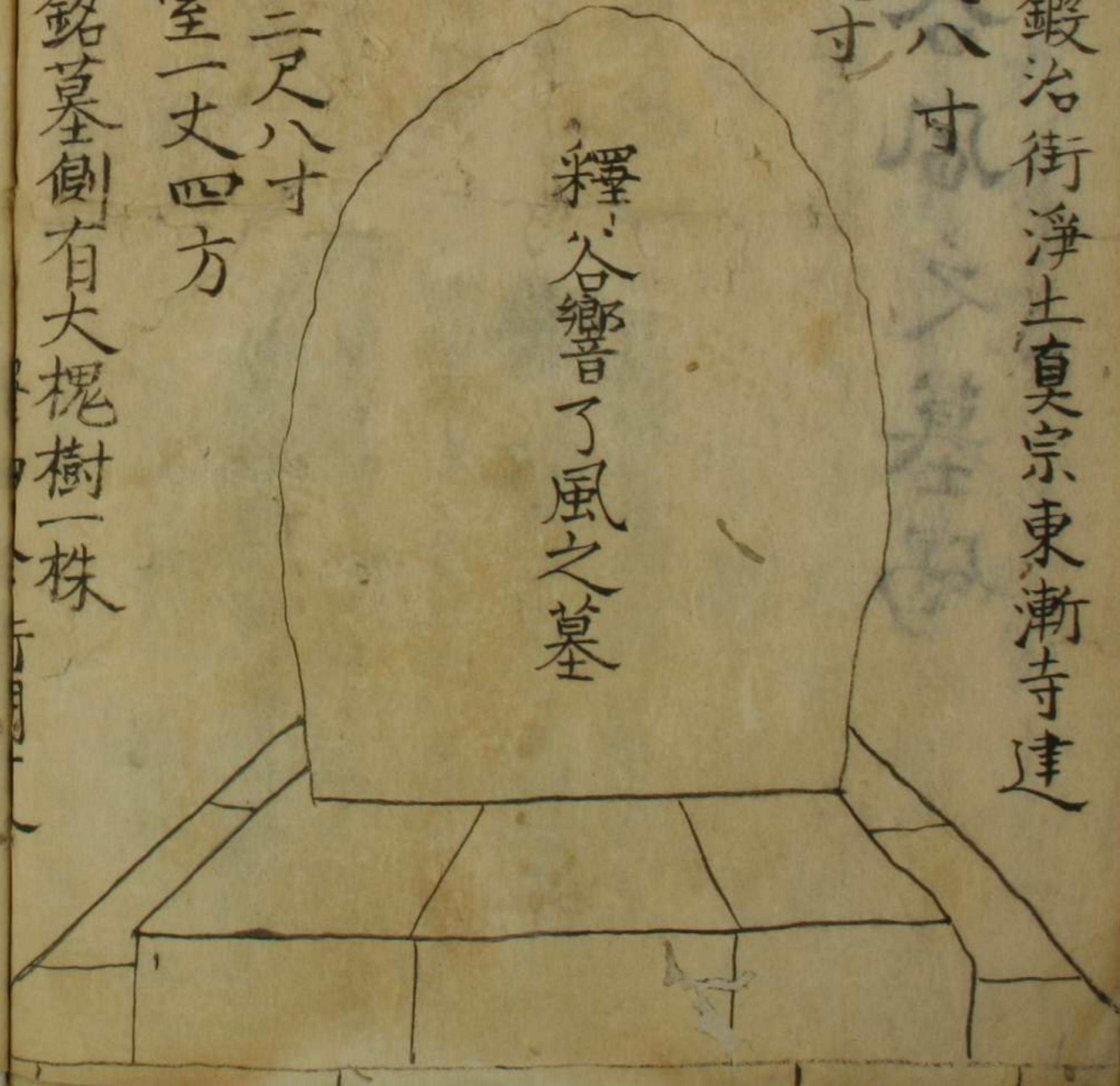
寸餘

中臺石高二尺八寸

方七尺下臺一丈四方

左右後碑銘墓側有大槐樹一株

釋谷響了風之墓



谷風梶之助守胤碑銘

力士谷風姓源氏金子小字與四郎世業  
農父彌右衛門其氏以寬延三年庚午  
八月八日生於宮城郡霞目邑性有力比  
九歲能負斗米行數步里人驚歎為神童  
幼戲好相撲顧異邦角觝之屬者吾朝  
權輿於神代以降以野見宿禰當麻蹶  
速為創業此技丈夫壯觀而分曹別隊振  
古稱左右後世換東西各立魁曾稱最手  
後今謂大関然上古  
帝勅立指揮曹部折斷勝負敗無偏無頗

為褒貶者，謂之御行司。今也熊本侯之臣，吉田氏追風者，自先世業之。蓋谷風長八尺餘，力能扛鼎，年僅十九矣。甫選其曹，稱秀山，頗著逸群之兆。藩族鄉片倉氏為臣僕，俸資勉業，始出于東都。及京洛技場，又更達箇閑，揄揚甚矣。曩者有先魁谷風，遺譽籍於人口。後進當其量，則衆議以襲稱其名。舊有例，嘗無其人，而達箇閑能當之，故改曰谷風。稱祝之助，名守胤。年己二十七矣。弟某亦善其技，於是與己所稱以名達箇閑。近吉田氏使谷風容門下力士，且得授橫綱之傳，蓋帶裝腰之物，而副與祕書力士之稱，或所同也。綱所獨也。於技得歆羨，于時寬政三年辛亥六月十一日，幕府命觀其技。谷風為曹最手役，敵於東方魁某者，勝之，則賜懸弧是例也。雄名雷震，搯腕抵掌，其黨之喜可知矣。尋又有命六年甲寅五月二十二日，復勝東魁敵者，而褒賜如舊。於是乎無雙之名，洋溢乎天下。先是其父病將死，乞傍人啟其手書，日本一之字於掌上，即言余竊念吾子之業，以之稱焉。既吾命在早夕，無日待之所。

祈復示勸獎之微志耳。未幾果如其言。人皆感父鑒戒云。其為人惟孝。友于兄弟。惠愛鄉黨。不忘。死於畝之中。能肯播獲之業。增益田宅。補給產基。常教技。不惜四支。無驕且吝。梗槩如此。今茲罹疾。死七年乙卯正月九日。年四十六。葬于里中。塋側表其墓。碣嚮當在東都。妻太田氏某女。以歸宜家。生四男。長子某為嗣。而其數友深悼惜。戮力欲別復三碑于城南東漸寺。勒其事。恃良朋村長澤畑氏德憑之。且掌之。來謀於余。顧乞文學先生之言。以為不朽。乃謂道不同。則不可相為謀乎。雖然。淳興于大國。觀其光。不可不記。故按狀畧叙其人。繫以銘曰。名洽一國。惟以力通。鷹揚鵬擊。廣譽令終。寬政七年乙卯孟秋。

仙臺新井義路撰併書

大觀玄澤手抄

